

愛のかたち

奨励	三好 三恵子〔みよし・みえこ〕
奨励者紹介	同志社女子中学校・高等学校嘱託講師（音楽科）

愛には偽りがあってはなりません。悪を憎み、善から離れず、兄弟愛をもって互いに愛し、尊敬をもって互いに相手を優れた者と思いなさい。怠らず励み、霊に燃えて、主に仕えなさい。希望をもって喜び、苦難を耐え忍び、たゆまず祈りなさい。聖なる者たちの貧しさを自分のものとして彼らを助け、旅人をもてなすよう努めなさい。あなたがたを迫害する者のために祝福を祈りなさい。祝福を祈るのであって、呪ってはなりません。喜び人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。互いに思いを一つにし、高ぶらず、身分の低い人々と交わりなさい。自分を賢い者とうぬぼれてはなりません。だれに対しても悪に悪を返さず、すべての人の前で善を行うように心がけなさい。できれば、せめてあなたがたは、すべての人と平和に暮らさない。

（ローマの信徒への手紙 12章9―18節）

はじめに

今年は同志社創立140周年を迎える年です。

年初めに私の所属する教会の牧師が礼拝のなかで、ナポレオンの帝政が終わりを告げてから200年、第二次世界大戦が終わってから70年、ベトナム戦争終結から40年、阪神淡路大震災と地下鉄サリン事件から20年、JR福知山線脱線事故から10年という節目の年でもあると教えられた。

それぞれの歴史のなかで、多くの方がこの世に生きたその歴史を思い、特に今なお遺族、ご家族の方たちの終わることのない深い悲しみ、苦しみ、悩みに思いを馳せながら今年も日々祈りつつ過ごしていきたいと願っている。

さて、日本人は信心深い一部の人たちを除き、多くの人びとは年末年始、お彼岸やお盆、結婚、葬式、また子どもの成長の節目などその折々に、必要に応じてさまざまな宗教を都合よく利用して生活している。

クリスマスにはクリスチャンであろうとなかろうとパーティーをし、クリスマスキャロルを歌い、クリスマスケーキを食べ、子どもたちはサンタからのプレゼントを心待ちにしている。そして、クリスマスの本当の意味を知らなくてもデパートなどではクリスマスセールをして、人びとの心と気持ちを惹きつけている。

日本の教会では、24日のクリスマスイヴ礼拝や25日の子どもの教会クリスマス礼拝が終わるとすぐに、クリスマスグッズがすっかり片付けられ、新年を迎える準備に入る。

ところが、昔からヨーロッパのカトリック圏では子どもたちはイヴではなく、1月6日にプレゼントをもらい、この日までクリスマスの飾りつけは片付けないとのことだ。

公現日

さて、イエスの誕生日、12月25日までの4週間は主の来られる日を待ち望む待降節、お誕生以後の約2週間（1月6日直後の主日まで）は降誕節という。

1月6日はキリスト教の暦ではエピファニー（Epiphany）すなわち公現日という。ギリシア語のエピファネイア（Epiphaneia）からきた言葉で、天空に神が現れるような奇跡のこと。すなわち神の子イエスが人の形をとって、私たちの前に姿を現され、神の子であると示されたということで、英語のappearの語源でもある。この日は、東方から異邦人である博士たちが星に導かれてはるばる旅し、ベツレヘムでキリストを探し当て、宝物を贈りその誕生を祝った日である。

今年も昨日がその公現日であった。この日になると19世紀アメリカの牧師であり教育者、作家で多くの名言を残したヘンリー・ヴァン・ダイクの話が思い出される。

聖書には「東方から来た博士たち」とだけ記載されている。東方とはメソポタミアのバビロニア地方、今のイラクあたりで、BC6世紀のバビロン捕囚を思い起こす。この60年にも及ぶ捕囚期間の間に、占星術の専門家でもあったバビロニアの博士たちは、ユダヤ人が大切にしていた旧約聖書に触れることができたであろうし、預言者についても研究していたことであろう。

同志社女子部では、大正年間から戦争の一時期を除き、クリスマスにはベージェント礼拝を守ってきているが、このなかで三人の博士たちに扮した高校1年から3年の各学年代表者三名が、栄光館の一番後ろのドアから入場して、全校生の歌うキャロルに合わせて宝物を捧げ持ちながら行進して壇上まで歩いて行く。

もう一人の博士

聖書のどこにも博士が三人であるとは記載されていないが、黄金・乳香・没薬とあるので、三人であろうと解釈されていて、世界中の画家たちによるイエス降誕の絵画でもこれら三博士の場面が多く描かれている。メルキオール博士が持参した黄金は王権の象徴、すなわちキリストを王と認めたということ。バルタザール博士の乳香は神性の象徴、すなわちキリストを神と認め、カスパール博士の没薬は、後の受難の死の象徴で、人としてこの世に来られたことを指しているという。ところが、これら三博士の他にもう一人、アルタバンという名の博士も彼らとともにベツレヘムに向かおうとしていたという話が、ダイクの『もう一人の博士』の始めなのである。

アルタバンは、三博士たちとの待ち合わせ場所に急ぐ旅の途中、倒れていたユダヤ人旅人を介抱したため、待ち合わせに遅れたが、全財産を売って手に入れた三つの宝石のうちの一つでらくだを買い、三博士の後を追ってベツレヘムにたどり着いた。しかし、時すでに遅く、両親に連れられた幼子はエジプトに。そして、男の子を殺すためにやって来た兵士から、出会った母子を助けるために二つ目の宝石を使ってしまう。その後、イエスを訪ねてはるばるエジプトに行くが、イエスに出会えず、代わりに多くの苦しみ、悲しむ人びとを助け、愛の行いをして歩いた。いつの間にか三十余年もの年月を経て年を取ったアルタバンは、最後の望みをかけ、再びユダヤに帰り、エルサレムにたどり着いた。ところがちょうどイエスが十字架につけられるために、引張っていかれるところであった。イエスに近づこうとしたとき、そこで出会った奴隷に売られる寸前の一人の娘を助けるために、長年イエスに捧げるために大切に持ち歩いた最後の宝石を手放してしまう。そして、ついに力尽き倒れたアルタバンにイエスの言葉が聞こえる。「あなたがこの人たちにした愛の行いは、私にしたのと同じだ」と。イエスを慕い、愛し、また自身も周りの人たちを心から愛することのできたアルタバンの愛の心と行いこそ、三つの宝石のどれよりも素晴らしいイエスへの捧げものであった。

ルカによる福音書のなかの「善いサマリア人」も、アルタバン同様イエスの愛を実践した人として描かれている。

愛の実践

イエスの時代から2000年以上経た今日までに、こうしてイエスの愛を人びとに示し、「地の塩、世の光」となった人は全世界に大勢いる。古くはアッシジの聖フランシスコ、またシュヴァイツァー博士、マザー・テレサ、同志社ゆかりの人で言えば、33歳という若さで単身来日し、同志社女学校のためにその生涯を捧げられたミス・デントン。同志社女学校出身で、ハンセン病との診断を受け、誤診と判明後も療養所に留まり看護婦として多くの病に苦しむ方々を支え続け、ナイチンゲール徽章や、同志社大学名誉博士号を授与された、井深八重。彼女は遠藤周作の『わたしが・棄てた・女』のヒロインのモデルにもなっている。

そのような偉業は成せなくても、私たちは神から人それぞれに顔、形が違いうように、タレントを与えられている。どんなに些細なことでも、自分にしかできないことを日々の生活のなかで行い、パウロの言うとおり「兄弟愛をもって互いに愛し、尊敬をもって互いに相手を優れた者と思い」「霊に燃えて主に仕え、希望をもって喜び、苦難を耐え忍び、たゆまず祈り」「迫害する者のために祝福を祈り」「喜び人と共に喜び、泣く人と共に泣く」ことのできる人になりたいと願っている。

同志社で学ぶものとして

皆さんの歩む人生にはどんなことが待ち受けているか、知る由もないが希望をもって喜び、苦難を耐え忍び、たゆまず祈る姿勢が、知らず知らずのうちに周りの人たちの光となるのではないだろうか。

新島先生は、同志社建学の精神はキリスト教精神に基づく「良心」であると教え、知識を得るだけではなく、徳を高め「一国の良心」たる人物を世に送り出して欲しいと切に望まれた。まさに、このことを実践する人こそ、聖書にいう「喜び人と共に喜び、泣く人と共に泣く」人でもあると思う。

同志社創立時から今日に至るまで、置かれているその場で自分らしく気負わず、あるがままの自分がそこにいるだけで神の御業が現れ、周りの人たちを明るく照らす世の光となっているのだと、多くの信仰の先達たちが身をもって示されている。

新島先生は、「わが校の門をくぐりたる者は、政治家になるもよし、宗教家になるもよし、実業家になるもよし、教育家になるもよし、文学者になるもよし。かつ少々角あるも可。奇骨あるも可。ただかの優柔不断にして安逸をむさぼり、いやしくも姑息の計をなすがごとき軟骨漢には決してならぬこと」（『現代語で読む新島襄』編集委員会編『現代語で読む新島襄』丸善 2000年）を切に願っておられる。

不思議な神のご計画により同志社に入学し、今日まで学びを深めてきた皆さんは新島先生が切に望み願われたこの言葉を理解し、秋学期の統一テーマである「愛によって互いに仕えなさい」の聖句が示すように、いついかなるときでも具体的にどのようなかたちで「愛によって互いに仕え」合えるのかを考えながら生きていかねばならない。

大学生の皆さんのなかには、まもなく就職など人生のなかで大きな転機を迎える人もいるだろう。今まで守られ大切に育てられてきた生活から世の荒波のなかに出て行くが、大丈夫。いつ何なるときにも愛の神が共にいてくださる。同志社人として自分のできるかたちで、どんな人とも等しく交わり、互いに認め合い愛し合える関係を作り、全ての人と平和に暮らせるようにと祈っている。